

博士（行動科学） 云肖梅（ウンショウバイ）

学位論文題名

トゥメト・モンゴル人の文化変化と 民族的アイデンティティ

学位論文内容の要旨

本論文では、人類学的視点から内モンゴルにおけるトゥメト・モンゴル人の文化変化と社会生活の様態に焦点を当て、1940年代以降を中心に、村から都市、集団から個人への考察を通し、トゥメト・モンゴル人の民族的アイデンティティの実態を検討している。トゥメト・モンゴル人は長期にわたって漢人文化の影響を受けながらも、1940年代までは文化要素及び社会生活における独自性によって、モンゴル人としての民族的アイデンティティを持っていた。新中国成立以降、政治運動及び都市移住といった社会変化の中で、モンゴル人としての認識を保持しながらも、民族的アイデンティティの多様性を呈している。こういった変化がX村とZ村に在住するトゥメト・モンゴル人、及び両村から都市部に移住した者に対する調査により明らかになった。

第1章序論では、まず研究対象であるトゥメト・モンゴル人が漢人文化に影響され、モンゴル語を失った歴史的経緯を概略的に述べた。次に従来の研究に欠如しているトゥメト・モンゴル人の文化変化と民族的アイデンティティを明らかにするという研究目的を述べ、さらに社会変化と関連させながら、集団と個人の行動様式を考察するという人類学的研究方法を説明した。

第2章では、トゥメト文化形成の背景として、歴史文献を中心に、旗県分立制度、開墾の展開、土地をめぐる蒙漢関係の変化を考察し、清朝以来確立された蒙漢分立の複合的社会構造の特徴を分析した。

第3章では、地方誌資料と調査資料に基づき、X村とZ村における現地調査と比較しながら、1940年代までのトゥメト文化のあり方を描き、漢人文化を受容する中で示されるトゥメト文化の独自性を検討した。これらの独自性がトゥメト文化を構成したことを提示した。

第4章では、X村とZ村における現地調査に基づき、1940年代におけるトゥメト・モンゴル人の文化諸様相と生計、親族関係などの社会生活を再構成し、当時の民族的アイデンティティを分析した。トゥメト・モンゴル人は漢人の文化要素を多く取り入れ、モンゴル語を喪失したにもかかわらず、トゥメト文化要素及び社会生活の独自性により、モンゴル人としての民族的アイデンティティを持っていたことを明らかにした。

第5章では、新中国成立以来の歴史を新中国初期、文化大革命期及び改革開放以降の三

つの段階に分け、両村におけるトゥメト・モンゴル人の文化要素の継続、婚姻関係および民族教育状況などを通し、トゥメト・モンゴル人の文化と民族的アイデンティティの変化過程を検討した。民族政策と政治運動の影響で、両村のトゥメト・モンゴル人は民族文化要素を部分的に保留し、民族教育を受け、モンゴル人の民族的アイデンティティを保持している一方、漢人との結婚が増えつつあるという現状が、全体を通して明らかにされた。

第6章では、統計的手法を用い、都市で生活を営んでいるトゥメト・モンゴル人の民族的アイデンティティの様相を全体的に把握した。ここではトゥメト文化要素の継続、親族関係の活性化、及びトゥメト・モンゴル人幹部と民族学校を中心とする社会関係の維持などの様相が観察されたが、民族学校の衰退と異民族間の結婚の増加が彼らの結束を弱めている。

第7章では同じ出自の兄弟と彼らの子供たちのライフヒストリーを記載し、個人レベルでの民族的アイデンティティの世代差と個人差をまとめた。民族的アイデンティティの確立は文化要素と親族関係の継続でもあれば、自己の権益を獲得するための現実的な選択でもあるという実態を明らかにし、同時にその選択に影響を与えた社会状況も検討した。

第8章結論ではまず、トゥメト・モンゴル人の文化様相から、トゥメト文化の成立と変化を辿った。トゥメト文化という概念の確立によって、トゥメト・モンゴル人の文化様相を理論的にモンゴル文化に所属させるか、または漢文化に所属させるかというように二元的に分類することを回避し、モンゴル文化から変貌し、漢文化には合流していないトゥメト文化要素を正確に描くことができた。次に、1940年代以降を中心に、村から都市、集団から個人への考察を通し、トゥメト・モンゴル人がモンゴル人としての認識を保持しながらも、民族的アイデンティティの多様性を呈している実態を明らかにした。さらに、トゥメト・モンゴル人の民族的アイデンティティ形成の諸要素、つまり、トゥメト文化の維持、トゥメト・モンゴル人幹部の存在、家族と親族連帯意識の継続、及び集団意識を育成する民族学校の影響などを取り上げた。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 煎 本 孝 (行動科学専攻)

副 査 教 授 宮 武 公 夫 (行動科学専攻)

副 査 教 授 津 曲 敏 郎 (言語学専攻)

学 位 論 文 題 名

トゥメト・モンゴル人の文化変化と 民族的アイデンティティ

本論文では、人類学的視点から内モンゴルにおけるトゥメト・モンゴル人の文化変化と社会生活の様態に焦点を当て、1940年代以降を中心に、村から都市、集団から個人への考察を通し、トゥメト・モンゴル人の民族的アイデンティティの実態を検討している。トゥメト・モンゴル人は長期にわたって漢人文化の影響を受けながらも、1940年代までは文化要素及び社会生活における独自性によって、モンゴル人としての民族的アイデンティティを持っていた。新中国成立以降、政治運動及び都市移住といった社会変化の中で、モンゴル人としての認識を保持しながらも、民族的アイデンティティの多様性を呈している。こういった変化がX村とZ村に在住するトゥメト・モンゴル人、及び両村から都市部に移住した者に対する調査により明らかになった。同氏がトゥメト・モンゴル人であるとはいえ、トゥメト・モンゴル人の文化変化と民族的アイデンティティを明らかにするにあたって、調査対象としてX村Z村におけるトゥメト・モンゴル人及び両村から都市への移住者を主に扱っており、その結果はあくまでこれら分析対象に制限されたものである。しかし、本研究は参与観察、統計分析、個人ライフストーリーなどの方法を併用し、集団から個人に考察を加えることにより、トゥメト文化と民族的アイデンティティの全体相を把握するには大きな支障はないものと考えられ、本論文の結果は博士論文として高く評価されるものと判断する。

本論文のもととなった研究の一部は既に学会誌、科学研究報告書などに発表されている。とりわけ本論文は、トゥメト・モンゴル人の文化と民族的アイデンティティに関する文化人類学の領域にわたり、トゥメト・モンゴル人の文化変化、民族的アイデンティティの全体的様相を理解するため、貴重な資料と分析結果を提供している点で、今後のモンゴル研究の推進に大きく貢献するものである。

本論文の博士論文としての内容、およびその学問的貢献は高く評価される。当委員会は、本論文が博士(行動科学)を授与するに十分値する学問的価値を持つものと全員一致して認めるものである。